

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	学校全体として人権尊重の視点に立った学校づくりが組織的かつ効果的に進められている実践事例
-------	--

1. 基本情報

都道府県名及び市町村名

三重県伊賀市

学校名

伊賀市立柘植小学校

学校のURL

<http://www.iga.ed.jp/tsuge-e/>

2. 学校紹介

学級数

【通常の学級】全学年各1学級、【特別支援学級】2学級、【合計】8学級

児童生徒数

【全児童数】153人（平成23年12月22日現在）
（内訳：1年生29人、2年生16人、3年生23人、4年生24人、5年生29人、6年生32人）

学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

子どもたちの社会的自立をめざす、確かな「進路保障」の創造

～ 合い言葉は「読み・書き・算術、ボケとツッコミ、名人」～

人権教育にかかる取組の全体概要

柘植小学校には、さまざまな理由により一人親のもとで暮らす子ども、祖父母のもとで暮らす子どもがたくさんいる。その家庭状況は、文化的・経済的な厳しさと重なり、子どもたちにとっては生活リズムの乱れや学力の課題として、保護者にとっては子育ての不安や悩み、地域から孤立しがちな姿として現れていた。このことは、子どもたちの自尊感情、未来への展望、社会的自立に大きく影響を及ぼしているということでもある。いつの時代においても、社会の矛盾や歪みが重層的に重なった結果は、被差別の子どもたちをはじめとする厳しい状況にある子どもたちの姿に象徴的に伺うことができる。

本校では、それらの現状を学校の最も重要な教育課題として位置づけ、そこから学んだ教訓や財産をすべての子どもたちへの教育活動として拡げてきた。それは、「差別と貧困の世代間連鎖」を断ち切り、「同和教育の普遍性」や「人権教育こそ教育の基本」の内実を確かめてきた歴史であったと言える。

特に、2008(平成20)年度からは、「子どもたちの社会的自立をめざす『確かな進路

保障』の創造」をテーマに、「なかまづくり・学級集団づくり」をすべての基盤として位置づけ、「エンパワメントの力」「リテラシーの力」「キャリアビジョンの力」の三側面として理論整理をした独自のキャリア教育の枠組に基づき、学校全体として取組を進めてきている。

3. 特色ある実践事例の内容

人権尊重の視点に立った学校づくりの取組

修学旅行での大学体感
「人権問題を研究する大学生のサークル」
の学生から、聞きとりをする子どもたち



高学年での職場体験

5,6年生は、一人一事業所3日間の職場体験

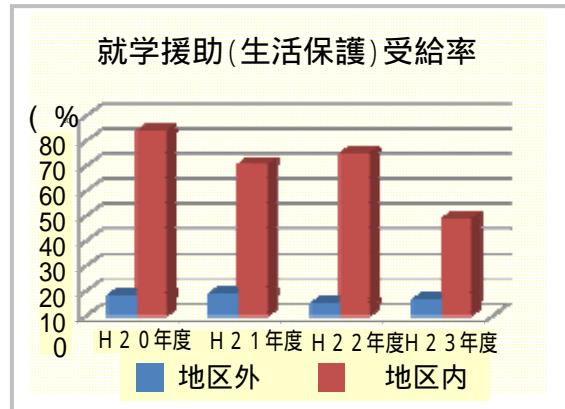
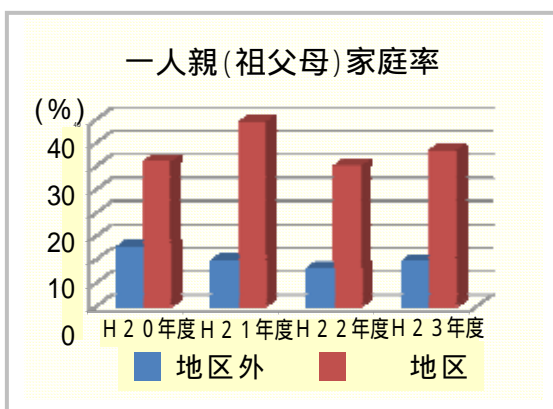
現在、柘植小学校では、『子どもたちの社会的自立をめざす、確かな「進路保障」の創造 ~合い言葉は「読み・書き・算術、ポケとツッコミ、 名人」~』という教育目標のもと、子どもたち自身が自分の将来について考え、憧れる職業について理解を深め、職業や仕事への夢を育む中で、自己実現に必要なことに気づいていく取組を進めてきている。

私たちが現在の取組に至るには、次のような経緯があった。

(1) 取組を始めたきっかけ

本校は、同和地区（以下「地区」とする）を有する学校である。特に、地区内においては、離婚による一人親家庭の増加が長引く不況とも重なり、就学援助（含む生活保護）の受給率が高くなっていった。

そして、その状況下で暮らす子どもたちの姿を見たとき、以下の3つの課題が浮き彫りになっていた。



低学力傾向

学力分布を見たときに2極化の状況があり、その下位層に地区内の子どもたちが多数を占めていた。

生活経験の違い

修学旅行のバスの中で、進行に合わせて開く高速道路のETCゲートを見て、びっくりして担任の顔を見る子どもや、海辺の学校との交流会で「海の水って、からいんや。」と実感する子どもの声に象徴される、生活経験の違いも非常に大きなものであった。

将来展望の差

2年生の子どもに知っている仕事を尋ねると、中には20個ほど言えた子どももいたが、2つしか言えない子どももいた。それは、お母さんとおばあちゃんの仕事だった。5年生のある子どもに、「将来、就きたい仕事は？」と聞くと、「フリーター！」と返ってきたこともあった。生活経験の違いが、将来展望の差にまでつながっていた。

(2) 課題克服のための取組内容

子どもたちにつけたい三つの力と一つの土台

エンパワメントの力

子どもたちに自信や誇りを獲得させ、自己肯定感を育む力を「エンパワメントの力」とし、「自分のくらしを見つめ、自分を取り巻く人々の願いを受けとめ、生活を高めていこうとする力」と定義づけた。

リテラシーの力

学力格差や低学力傾向も含めた学力の課題を克服する力を「リテラシーの力」とし、「教科の学力を高め、情報を正しく活用し、確かな判断力をもとに問題を解決していく力」と定義づけた。

キャリアビジョンの力

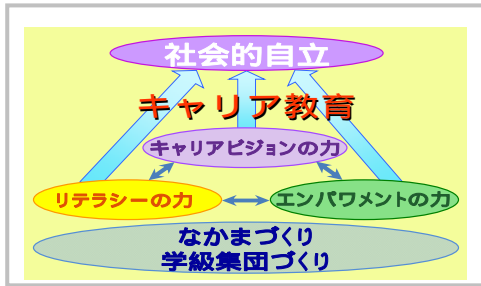
生活状況や環境の違いで、生活経験や将来展望に差が生じている課題についてつけたい力を「キャリアビジョンの力」とし、「多様な人生モデル、職業モデルとの出会いや体験活動を通して、自分なりの生活や将来を思い描く力」と定義づけた。

土台としてのなかまづくり・学級集団づくり

「生まれも育ちも違う子どもたち一人ひとりがなかまとの関係を築いていくためには、自分たちのくらしを差し出し合い、お互いのことを深く知り合うところからしか始まらない」という認識のもと、「なかまづくり・学級集団づくり」においては、以下の3つの原則を教職員で共通理解し取組を進めている。

学級の中のしんどい子どもの姿が、取組の課題や成果を象徴的に表していること。私たちの考える「なかま」は、それぞれの子どもたちに個性があり、くらしがあり、さまざまな悩みをもってくらししているということをわかり合った上でのなかまなんだということ。

なかまづくりは、自分たち教職員の意図的で継続的な取組によって生み出されるものであること。

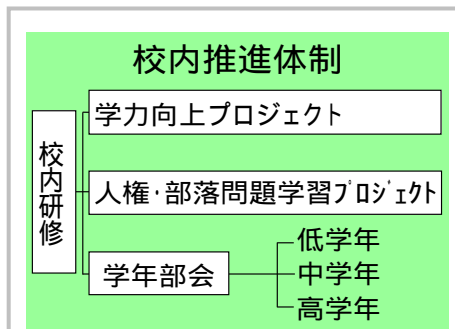


左記の図は、「第三次とりまとめ」の「人権尊重の視点に立った学校づくり」で示されている「人権が尊重される環境づくり・人間関係づくり・学習活動づくり」を参考にしながら、本校の枠組みとして示したものである。

この全体像を、柘植小学校の「キャリア教育」と呼んでいる。

「学校マニフェスト」と校内推進体制

伊賀市の各学校では、「学校マニフェスト」を作成して、保護者・地域、他の学校、市議会、マスコミにも公表することになっている。本校においても、年度始めに、目標や方針などを学力向上プロジェクトと人権・部落問題学習プロジェクトで検討し、具体的な取組の文言として表し、学校マニフェストに盛り込んでいる。



具体的な取組の事例

私たちは、「なかまづくり・学級集団づくり」を進めるために、子どもたちが自分のくらしの一場面を中心に書いてきた日記を掲載した「一枚文集」を読み合うことを大事にしてきている。帰りの会などで読み合い聞き合う中で、子どもたちは少しずつ自分のくらしについて書いてくるようになる。

その中には、友だちのことや家族のこと、さらには学校で学習している人権学習について自分が考えたことなども書かれてくる。

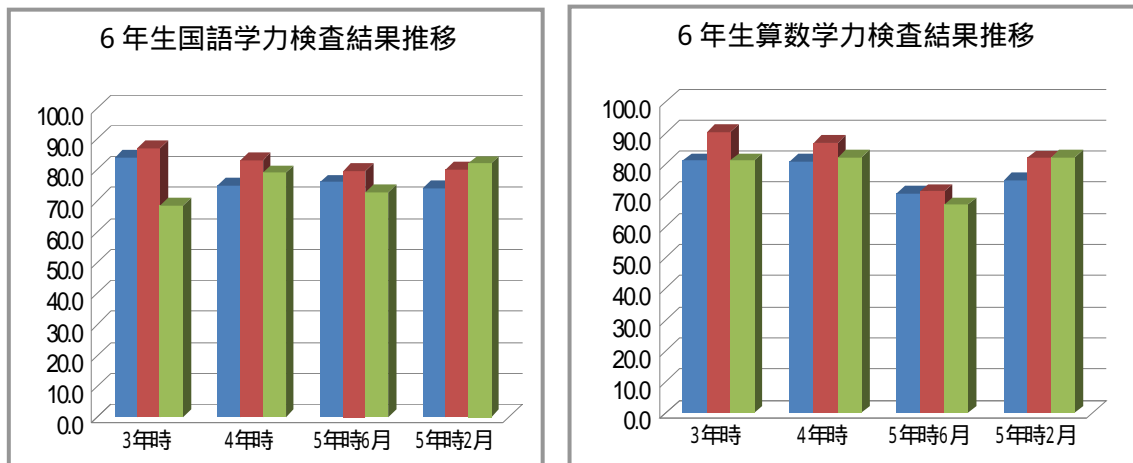
～ 6年生の一枚文集より～

部落問題	A・H
今日の5・6限目に、木学メンバーの話をお聞きしました。そして、今も部落差別があること、部落差別をしているのはまわりの人たちだということを知りました。私も差別する側と知って、少し心が痛くなりました。	
昔のことではないことを知って、私は友だちの　　ちゃんや　　ちゃんのお姉さんのことを考えました。　　ちゃんが、	
「姉の友だちが、『どこから来たんや。』と聞かれて、『　　です。』と言った時、相手の様子が変わってしまったということがありました。」	
と話してくれて、「今のことなんだ」「　　ちゃんのことなんだ」と思いました。	
私は木学メンバーの話をお聞いて、みんなの気持ちを知って、考えました。家でも父や母と話したいと思っています。	

4. 実践事例の実績、実施による効果

(1) 教科学力の向上

積み上げてきた取組の成果が、一番見えやすい形で現れたのが「リテラシーの力」、特に教科の学力であった。現在の6年生[2011(平成23)年度]は、3年生時[2008(平成20)年度]の標準学力検査において、学級平均は全国平均を上回っていたが、地区児童の平均は全国平均を15ポイント以上下回っていた。波があったりまだまだ課題があったりするものの、地区児童の平均は学級平均に近いところまで上がってきている。積年の課題であった子どもたちの学力が、少しずつであるが向上してきている。



【凡例】 全国平均 学級平均 地区児童

(2) キャリア教育がもたらした学力向上

～2009(平成21)年度全国人権・同和教育研究大会地元特別報告より～

3歳の頃に、自分たち姉弟や家族を捨てて出ていった父親に対して、「うちは、おやじがきらいや。あんなおやじなんか・・・。」と、つぶやくみさき(仮名)という子どもがいました。

みさきは、祖母からの「あんなおやじとちがう。他人や。」という言葉や、心の病で仕事についていない母親の姿を見るにつけ、父親に対する憎しみは強くなっていきました。

しかし、担任の何回にも渡る家庭訪問でのみさきとの話し込みや、学校での人権・部落問題学習を進めていく中で、「うちら姉弟を捨てて出ていったおやじやけど、そのおやじと母親がいたからこそ、今の自分が存在するのだ」と気づき始めます。

さらにみさきは、限られた父親との記憶をたどっていく中で、「本当は、自分たちとも別れたくなかったのかも・・・。」と少しずつ変化していきます。

しかし、彼女は「今度、出会ったときには言いたいことがある。」と言います。「『なんで、うちらを捨てて出ていったん。うちらのことどう思ってるの?』と聞きたい。でもその時は、『はずかしくない自分を見せていきたい。』」

「はずかしくない自分って何や?」と聞くと、「それはバリバリ働いている自分や。」と言います。

彼女は、将来、理学療法士をめざしています。職場体験もその関連施設に行きました。そのためには勉強が大事で、苦手な算数もがんばろうと決意していくようになっていきます。

上記の報告から伺えるように、「リテラシーの力」として教科の授業改善に取り組んできたことはもちろんのこと、「なかまづくり・学級集団づくり」の土台に加えて、「エンパワメントの力」「キャリアビジョンの力」のそれぞれが相互に影響し合った結果だと考えている。

(3) 保護者や地域からの信頼

また、学校の取組が保護者や地域の共感と賛同、信頼を生んでいることが実感できる場面がある。保護者による家庭学習習慣づくりを中心とする学力向上に向けた取組への協働や、20数年続けている「同和問題地区別懇談会」での子どもの学習内容の共有や、本校のPTA組織である「育友会」が「ゲームの時間を減らそう」「一枚文集に必ず目を通そう」などの「保護者マニフェスト」を策定してくれている場面などである。地域の教育ボランティアによる、行事の補助や絵本の読み聞かせなどの様々な積極的な支援が生まれている。

5. 実践事例についての評価

(1) 教職員評価より

長年に渡り積み上げてきた取組を、一つの土台と三側面に位置づけ直し、各学年の「キャリア教育年間計画」として一定の人権教育のカリキュラムに整理することができたことは大きな成果である。「なかまづくり・学級集団づくり」を基盤に据えた「エンパワメントの力」「リテラシーの力」「キャリアビジョンの力」の取組が相乗効果を生み、子どもたちが集団の中で安心感をもち、自己開示していく姿や、将来の夢から逆算して今の自分を見つめ直そうとする姿など、「人権尊重の視点に立った教室づくり・学校づくり」の具体像に近づいてきていると感じている。

(2) 学校関係者評価より

文部科学省の「学校評価ガイドライン」に沿って、学校が行った自己評価の客観性・透明性を高めるために、保護者・地域住民等からなる委員会による「学校関係者評価」を行っている。その中で、以下のような評価があった。

「人権について学ぶことはもちろんのこと、キャリア教育の推進、学力向上など、人権としての教育に熱心に取り組んでくださっていることに、教職員のみさんの努力の跡を感じました。」

(3) 今後に向けて

少しずつ将来展望をもち始めた子どもたちの姿を、小中学校の連続性の中で支え伸ばしていきたいと考え、「一小・一中」である校区の特性を活かして、一貫性のあるカリキュラムの作成に向けて取り組んできている。

また、3年前より就学前との連携強化も進めてきている。学力を下支えする経験値に課題が及んだ時、学力格差の芽生えは、すでに就学前からあるのではないかという認識のもと、2つの保育園と小中学校と人権センターも加わって、就学前教育についての研究を始めている。

今後、高等学校との連携も進めながら、保小中高等学校と保護者・地域全体をあげて、人権の尊重の精神に立つ学校づくり・地域づくりを進めていきたいと考えている。

【 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント 】

伊賀市立柘植小学校

同和教育の実践が大切にしてきた「進路保障」の課題を、今日的な人権教育の視点でとらえなおし、「エンパワメント」「リテラシー」「キャリアビジョン」という三つの側面からとらえている点に特徴がある。また、そのことを「読み・書き・算術、ポケとツッコミ、名人」というわかりやすい言い方で、学校の共通目標に位置付けることにより、「第三次とりまとめ」が強調する人権教育の組織的な取組の推進につながるものと思われる。さらに、一人親家庭の比率や就学援助率の高さといった困難な状況を抱えながらも、生活経験の幅を広げ、キャリアビジョン（将来展望）を切り開くための具体的な教育実践により、学力向上や集団づくりに効果をあげていること、および「学校マニフェスト」を作成し、具体的な数値目標を設定しながら、校内推進体制を基盤とする組織的な取組を展開している点なども注目される。